第１学年　国語科学習指導案

日　時　平成23年10月28日（金）　４校時
学　級　１年Ｂ組
（男子17名、女13名、計30名）
場　所　一関市立千厩中学校１年Ｂ組教室
授業者　教諭　稲　部　美　佳（Ｔ１）
講師　小　山　尚　也（Ｔ２）

１　単元名　　４　古典との出会い　「今に生きる言葉」

２　単元について

（１）教材について

本単元は、「いろは歌」「蓬莱の玉の枝」「今に生きる言葉」の三教材で構成されており、中学校の古典学習の導入単元として位置づけられている。

「いろは歌」は、七五調のリズミカルな文体で、初めて古典に触れる生徒にとっても親しみやすい教材である。また、「蓬莱の玉の枝」は日本最古の物語として人々に親しまれてきた「竹取物語」が基となる教材である。「かぐや姫」の昔話として、生徒にもなじみの深い教材であり、美しいかぐや姫の成長や貴公子たちの冒険談、文章自体の美しさなどを楽しむ中で、古典学習の基礎を養い、古典に親しむことができる。そして、「今に生きる言葉」では、昔の人が実生活の中で生きる知恵として大切にしてきた言葉が今も用いられている事に気づかせることで、古典が身近なものであると感じることができる。

これらのことから、古典の世界についての興味や関心を高め、さらに古典の世界を広げるために適している教材であると考える。

（２）生徒について

生徒は、これまでの学習において、文章の構成や表現の特徴について自分の考えをもつ学習、また目的に応じて必要な情報を読み取る学習などを行ってきた。どの学習も、意欲的に取り組む姿勢が見られる。しかし、自分の考えなどを表現することに苦手意識を持つ生徒もみられる。また、学習における上位層と下位層との差が激しいため１時間の授業展開の中に小グループでの学習活動を行うなどの指導形態を取り入れてきた。さらに、２学期にはペア学習も取り入れ学習の密接なつながりを図ってきている。

古典の学習については、「古典を見たり聞いたりした経験がある」と答えた生徒が半数以上おり、すでに小学校で古典に触れている生徒が多い。また、古典に対して「おもしろい」と感じている生徒や「いろいろな作品を読んでみたい」と意欲的な生徒もみられる。

そこで、小学校で触れた古典への関心を高め、さらに古典の世界を広げるような単元及び授業展開の工夫が必要である。

（３）指導について

小学校の学習指導要領では、小学校から中学校における古典教育に連続性をもたせ古典に対する苦手意識を和らげるよう意図されており、中学校の内容と重なる部分が多い。中学校では、小学校の学習を踏まえ、より一層古典に親しませながら、古典に対する関心を深めるような学習を行うことが大切であると考える。

そこで、単元の導入部分においては、現代に伝わる昔話とそれらの原点となる古典（現代語訳）を読み比べることで内容のおもしろさに気づかせたり、音読や暗唱といった音声言語の学習を通して古文特有のリズムに慣れさせたりすることで古典への苦手意識を和らげるとともに古典に対する興味をもたせることを学習の中心にしたいと考える。

故事成語においては、音読を通して漢文特有のリズムを味わいながら漢文の世界に触れさせるとともに、それぞれの言葉がもつ故事を自分の生活経験から書き換える活動を行うことによって、故事成語を日常生活に身近な親しみのもてる言葉としてとらえさせたい。

3　国語科における「活用を意識した学習のとらえ」

国語科においては、以下のような学習活動を、「活用を意識した学習活動」ととらえる。

（1）語彙能力を高め、自分の考えを整理したり、まとめたりして表現できる学習活動

（2）互いの考えを交流したり、比較したりしながら互いに高め合う学習活動

（3）様々な文章や本に接し、日常生活や社会生活に生かせる学習活動

4　単元の指導目標

（1）【国語への関心・意欲・態度】

古文や漢文の文章に関心をもち、進んで古典に触れようとする。

（2）【読むこと】

登場人物の言動や情景描写などに注意して読み、内容の理解に役立てる。

（3）【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項】

文語の決まりや訓読の仕方を知り、古文や漢文を音読して、古典特有のリズムを味わいながら、古典の世界に触れる。

5　単元の指導計画（８時間扱い）

時	学習内容	評価計画					「知識・技能の習得」の場面	「活用を意識した学習活動」の場面
		国語への関心・意欲・態度	話すこと聞くこと	書くこと	読むこと	伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項		
1	昔話とそのもとになった古典（現代語訳）の読み比べ	◆昔話と古典（現代語訳）との違いを見つけ出す。			◆昔話と古典（現代語訳）との違いを読み取る。		○昔話と古典（現代語訳）を比較して読む。	★昔話と古典（現代文）との違いをまとめ整理する。（活用１）
3	音読を通した「いろは歌」や「竹取物語」の内容理解	◆「いろは歌」や「竹取物語」の内容・表現に関心をもち、繰り返し音読する。			◆登場人物の心情や行動、情景描写に注意して読み、内容の理解を深める。	◆文語のきまりを知り、「いろは歌」や「竹取物語」を音読して、古典特有のリズムを味わう。	○歴史的仮名遣いに注意して音読する。	
1	昔話のもとになった古典（原文）の音読と、内容理解	◆作品の内容や表現に関心をもち、繰り返し音読する。			◆登場人物の心情や行動、情景描写に注意して読み、内容を理解する。	◆作品を音読して、古典特有のリズムを味わう。		★学習したことを活用して、教科書以外の古典を音読する。（活用３）
1	「矛盾」の訓読及び、故事と用例についての理解	◆「矛盾」の内容や表現に関心をもち、繰り返し音読する。			◆「矛盾」の故事について、その内容を理解する。	◆訓読の仕方を知り、「矛盾」を音読して、古典特有のリズムを味わいながら、古典の世界に触れる。	○訓読の仕方に注意しながら音読する。	

1	様々な故事成語の意味と由来の理解	◆資料から故事成語の意味や由来を調べる。			◆故事成語の意味と由来を理解する。	◆様々な故事成語があることを知る。		
1	故事成語の意味と自分の体験との関連づけ **［本時］**				◆故事成語について自分の体験と関連づけて考え、現代に生きるものの見方や考え方を理解する。			★故事成語の意味について、自分の体験と関連づけて書く。 （活用３）

6　本時の指導

（１）目標

故事成語について自分の体験と関連づけて考え、現代に生きるものの見方や考え方を理解する。〈読むこと（１）オ〉

（２）本時の構想

本時の授業では、前時までに学習した故事成語の中からひとつを選び、故事を書き換えるという学習を行う。自分の体験と故事成語を重ね合わせることを通して、故事成語は現代にも生きている言葉であることを理解することで、故事成語に新たな興味・関心をもたせることをねらいとしている。そのために次のように学習を展開する。

①　日常生活の中から故事と同じような体験がなかったかを振り返り、体験をもとに故事を書き換える。

②　書き換えた体験文をグループで交流する。

③　故事成語に対する自分の考えをまとめる。

なお、紀要の課題に記載した通り、国語科では「習得・活用・探求」の学習活動は相互に関連し合っており、截然と分類されるものではない。よって、本時の学習活動においても特記はしない。

（３）本時の評価規準

	Ａ：十分満足できる	Ｂ：おおむね満足できる	Ｃ：努力を要する生徒の手だて
読むこと	故事成語について、自分の体験と関連づけて考え、現代に生きるものの見方や考え方を理解し、自分のものの見方や考え方を広くする。	故事成語について、自分の体験と関連づけて考え、現代に生きるものの見方や考え方を理解する。**評価①**	故事成語から読み取れることを指摘させ、同じような体験がなかったか振りかえさせるようにする。

（4）展開

時	指導内容	学習活動	指導上の留意点（◎）、活用の場面（★）習得の場面（○）、評価（■）
導入 5分	1　音読 2　既習事項の確認 3　学習課題の提示 【学習課題】 故事に自分の体験を重ねてみよう。	1　これまでに学習した故事成語の書き下し文を音読する。 2　故事成語の意味と由来について確認する。 3　学習課題を把握する。	◎自分が選んだ故事成語について確認するように指示する。
展開 35分	4　故事に関する体験文の作成 5　体験文の紹介と体験文を書くことで感じたことの交流 6　「今に生きる言葉」としての故事成語	4　故事成語に関する体験文と体験文を書いてみてどう思ったかについて書く。 ・「だれが」「どうして」「どうなった」という要素を軸に、２００字程度で自分の体験をまとめる。 5　お互いの文章を紹介し合い、体験と故事成語を結びつけたことで分かったことや思ったことを交流する。 6　故事成語についての交流を通して、思ったことをまとめる。 【形式例】 最初故事成語は～だと思っていた。しかし、故事成語は～だと思うようになった。	◎家庭学習において、「だれが」「どうして」「どうなった」という要素を書いてきているか確認する。 （授業と連動した家庭学習） ◎文章を紹介し合うことだけではなく、体験文を書くことで、気がついたことについても述べさせる。 ◎故事成語は身近な言葉であるということを実感させるようにする。 ■故事成語について、自分の体験と関連づけて考え、故事成語が身近なものであるということを理解する。**（評価①）**
終末 10分	7　学習の振り返り 8　次時の予告	7　学習の振り返りを言葉でまとめる。 8　新しい単元を学習することを知る。	◎「どんなことを学んだか」「どんなことが分かったか」「どんな課題ができたか」についてまとめるよう指示する。

※　本時は、一単位時間全体が習得と活用に関わる場面なので、展開の中に習得（○）、活用（★）は表示しない。